

道 教 組

みんなで21世紀の未来をひらく

「教育のつどい」 in 香川 (8月16日~18日)



◆参加者（レポーター）の感想

- ・平川 美和（滝川市第一小学校）
- ・佐々木征司（幌延町問寒別小中学校）
- ・古川 晃男（釧路町富原小学校）
- ・大口加代子（せたな町若松小学校）
- ・記虎 孝弘（利尻町仙法師小学校）
- ・國保いずみ（平取町平取小学校）
- ・滝澤 圭（上ノ国町河北小学校）

道教組からの任務として参加した2名

団長 中山 晴生 司会者 内糸 俊男

みんなで21世紀の未来をひらく「教育のつどい2014 in 香川」

悪天候の中、全国からのべ5,000人の参加

檜山教組書記長 中山 晴生



香川で道教組参加者の団長として分科会を駆け回り、組合員の活躍を写真で撮ってくれた中山晴生さん

「教育のつどい2014in 香川」が、8月16～19日、雨模様の中香川県高松市で開催されました。3日間でのべ5,000人の教職員、父母、市民などが参加し、7つの教育フォーラム、28の分科会で熱い討論と交流が行われ、道教組からは、レポーター、司会者など計9名が参加しました。開会集会では、現地の大学生有志によるヒップホップダンス、高松空襲の手記の朗読「カンカン石」によるサヌカイト演奏、参加者全員で「故郷の合唱など、心が和むオープニングとなりました。

その後、いわさきちひろさんのお孫さんにあたる、絵本作家の松本春野さんと、東大教授・九条の会事務局長の小森陽一さんの「いま、憲法を守り、生かす」という対談がありました。松本さんの、しなやかで、みずみずしい感性を小森さんが上手く引き出し、人として、幸せを求める「本能」を共有していくことの大切さを紐解くような対談になり、参加者の共感を呼びました。

開会集会後、7つのフォーラムが開催され、「安倍教育再生」で噴出する問題点や教育の原点を確かめ合い、様々な課題を考え話し合いになりました。

2・3日目は、28の分科会が開催され、熱心な学び合いが行われました。また、2日目の夜には、道教組・高教組合同の参加者交流会が催され、18名が参加。自己紹介を中心に個性ほとばしるトークもあり、初対面がほとんどの中、少しですがお互いをわかり合える空間となり、大いに盛り上がりました。

今回、香川県知事選挙期間中という事情もあり、街宣カーを中心とした妨害行動は、一切なく、落ち着いた環境の中、教育研究が進められました。また、天候の悪い中、警備、道路や会場の案内など実行委員会の方々の尽力は、相当なものでした。このような支えの中、成功で幕を閉じられた「教育のつどい」は、来年度に引き継がれます。



技術・職業教育の司会者として活躍していただいた内糸俊男さん(檜山教組)

大切にされる経験を生きる希望に…

滝川第一小学校 平川 美和

昨年、北教組を脱退し、道教組に移籍したばかりの私が、綴り方のつたないレポートで、香川へ行かせていただきました。正直、全国まで何をしに行くのか…不安もありました。北教組空知北支部での非民主的な教研のあり方が納得いかずに脱退したものの、教研自体のレベルの高さは認めざるを得ない物でしたし、分会会議一つをとっても、どこの分会でも、尊敬できる先輩が沢山いたのも事実。移籍は、単なる私の我が儘ではないか、という自責の念に駆られ、心に迷いも出ていました。



しかし、香川の教育のつどいに参加させていただき、「全教に来た判断は間違えていなかった」と確信しました。真実をつらぬく本物の研修会に初めて出会えました。

まず、開会集会の対談では、松本春野さんの感受性の豊かさに心が震えました。フォーラムでは、教科書会社が教科書検定に苦しめられている事実を知り、道徳を違った側面から考えられそうです。国語分科会では、科学的体系的な「言語の教育」と、感性的理性的な「言語活動の教育」の二本の柱について、深い討論がありました。その日の夜、綴り方の共同研究者である得丸浩一さんら5名の京都の仲間とお酒を飲む機会に恵まれ、分科会一日目の総括を直接聴き、私なりに解釈しました。文芸研の典型化には、道徳の徳目主義に似た展開が起こりうるため、注意が必要なこと。また、文に着目した丁寧な読みを推進する立場からすると、場合によっては生活綴り方の精神は、科学的ではないという見方もあること。言語の教育と言語活動には矛盾した側面があるが、両方をうまく取り入れた実践は、まだ登場していないこと。

分科会二日目は、次の日が始業式のため、途中退席となり、朝一番にレポートを発表させてもらったあと、総括も聴けずに失礼しました。沢山の質問や感想、大きな共感を持って聴いて下さった会場に励ましを頂きました。

また、檜山の中山さんが企画して下さった東京の仲間との飲み会で出会った都教組町田支部の執行委員長渡辺真理子さんとの出会いも貴重でした。彼女は戦いではなく、教育委員会の人間をも許し、教育し、変革をつくった実践家で、権利闘争のおもしろさを初めて感じました。飲んだ話ばかりで恐縮ですが、毎晩、道教組の仲間と飲み歩いた香川の夜に、無駄な時間は一つもありませんでした。帰る間際の空港で、國保さん・古川さんに「一人にする訳ないでしょう」と言われた言葉は忘れられません。

最後に、家に着く間際に、京都の得丸さんから長いメール。分科会二日目、私のレポートへの総括が届き、泣きました。こんな自分を、大切に下さった皆さんありがとうございます。今大会の根底に「人を大切にする精神」が流れていたと感じます。今、私は、全教の一員であることを誇りに思っています。

香川初上陸 ～高松は熱かった！～

幌延町問寒別小中学校 佐々木 征司

8月16～18日、香川県高松市で行われた全国教研の第3分科会社会科教育部会にレポーターとして参加させていただきました。

香川県に入るのは初めてでした。しかし、苦手な暑い夏。

そこでまず本部の新保さんに服装について聞いたところ、

「暑くて大変なので、当日はゆったりとしたクールビズがいいです。そうでないと倒れます」とのこと。出発前には

台風による洪水や土砂災害が報じられ、さらに心配でした。ですが、全日程はすべて晴天。私の平熱である35℃に達し、とろけそうな中、初めての全国教研が始まりました。緊張は言うまでもなく、最高潮でした。

第3分科会は、香川大学教育学部の学部棟で行われました。私は前任校の枝幸町立枝幸中学校で行った、歴史の「第2次世界大戦」と公民の「国際社会と日本」の単元での「地域に住む方の戦争体験講話」の実践を報告させていただきました。

高田さんという方からは、太平洋戦争末期の海軍特別攻撃隊「伏龍」の体験を。また広田さんという方からは1945年8月6日、広島市内での被爆体験をそれぞれ生徒に語っていただきました。このとりくみは枝幸町教委の学校支援地域本部事業を活用して、人材の掘り起しや日程調整、打ち合わせを行いながらすすめてきました。このとりくみで生徒が歴史を身近に感じて学びを深め、平和について考える機会にしてほしいと考えました。そのためには地域に暮らす方から直接お話を聴くことは貴重な活動になると思い、スタートしました。

今回の報告で、生徒たちは教科書に載っていることと自分の地域の出来事を結びつけることで、自分たちにも関わりがあることに気づけたこと。また、複数の戦争体験を知ること、同じ時代にたくさんの悲しみがあつた事実を知ることができたことを、全国の方に紹介することができました。私のつたない報告では生徒の学びの様子をすべてを伝えきることはできなかつたかもしれません。ですが、道北の地でも生の悲惨な戦争の声を聴くことができる機会の価値を、多少なりとも参加者の方と共有できたのではないかと感じています。

また全国的な動きや先生方のとりくみ、そして教科書問題についても見識を深めることもできました。

そして、夜は道内各地の先生方と交流会。同分科会の川原先生を始め、他の先生方にも温かい激励の言葉をいただきました。とても楽しい時間となったのは言うまでもありません！みなさんもぜひ全道合研に参加し学び、そしてさらに全国へ。

この場をお借りして、このたびの全国教研に参加させていただいたこと、関係者の皆様、そして道教組のすべての方に感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。



全国教研でも出会いがありました

鉦路町富原小学校 古川 晃男

今年、人生で2回目の全国教研（みんなのつどい？）に参加してきました。四国に渡ったのは人生初のことです。

この全国教研について、開会集会のパフォーマンスが素晴らしかったとか、全体会の小森陽一氏と松本春野さんの対談が秀逸、でも小森陽一氏がうるさかったとか、分科会が最高に学べたとか、そういうことはきっと他のみなさんが異口同音に書いてくださると思いますので、私は全然別の角度から、いわば、スピノフ的なことを書きたいと思います。



実は、この夏の私の最大のイベントは「第50回矢臼別平和盆踊り大会」でした。私は矢臼別には大学生の頃からかかわってきていますし、今月（9月）私自身も50歳になるので、平和盆踊りの歴史は私の歴史ともダブるのです。何とか、この50回大会を成功させたいと一生懸命頑張りました。

矢臼別には、毎年、全国から沢山の方が訪れてくださいます。仕事しながら音楽サークルをしている方とか、あちこちの先生とか、招待しなくても自費で毎年来て下さる常連さんもたくさんいるのです。その中のひとり、兵庫の中学校の先生（ちなみに女性、この方も同じ年です）と、なんと、全国教研の全体会場でばったりお会いしたんです。いやいやびっくりしました。だって、8月10日まで矢臼別で髪の毛に枯れ草をくっつけていたような生活をしていたのに、1週間もたたないうちに四国で、小綺麗な格好で再会してるんですから。しかも、20以上もあるのに同じ分科会だということもびっくりでした。お互いにレポートの発表を聞きあい、学びあいました。

さらに、その方と話していたら、「そう言えばな、うちこの組合の書記長、鉦路の教育大出身言うてたで」と言うのです。その方と私と同年ですから、年代は近いと思って「名前はなんと言うんですか?」と聞くと、これまたびっくり。私が大学1年生のときに、寮で同じ班にいた4年生の先輩でした。私は1年生から寮務委員をしました。その先輩は自治会で活躍された方でした。当時、私はまだ先輩たちの使う「たたかい」という言葉がしっくりきてなくて、ただ、自分たちの住む寮を守りたいという一身で寮務委員をしていました。そのときに、その先輩が「いいかピカオ（当時の私の呼び名）守ることもたたかいなんだぞ」と教えてくれました。「ああ、そうなんだ」と心の奥にズドンと落ちる言葉でした。大げさな話、今のわたしがあるのはこのときの先輩のこの言葉のおかげです。そう、矢臼別に行くようになったのも。兵庫で教師になったことは知っていましたが、こんな風に間接的ですけど、またつながれたことに、感謝しています。

全国から人が集まるというのは、それだけすごいことなのだとつくづく思いました。

「障害児教育」に参加して

せたな町若松小学校 大口 加代子

特別支援学級で障害の重い子を担当して3年目。この間、学校ぐるみでのバックアップや様々な関係機関はじめ、全道合研や障害児教育フォーラムなどでたくさんのアドバイスや情報をいただきながらなんとかやってきました。

ですから、全国ではどんな先進的な取り組みがされているのだろうという期待と、初めて四国の地に足を踏み入れるワクワク感を胸に香川県高松市へ向けて出発しました。

「障害児教育」分科会は、まず奈良教育大学の越野和之氏による基調提案「障害者権利条約を生かし、権利としての障害児教育の今日的な課題を明らかにしよう！」の説明がありました。障害者権利条約を批准したという特別な意味をもつこの年に「教育のつどい」に参加できたことを大変光栄に思いました。「権利としての障害児教育」は、以前から心に留めてあったことですが、改悪教育基本法の下で強行されつつある「義務としての教育」の様々な問題点についても大変わかりやすく説明されたので、今まで断片的に聞いてきた問題が、「ああ、こういうことだったのか。」と一気に整理された気がします。

分科会はその後、6つの小分科会に分かれてレポート交流と検討が行われました。私は、「子ども期の教育（小学校）」小分科会での報告でしたが、発表後の質問や意見交流をしているうちに、いかに本校の現状が恵まれているかを再認識し、全国の障害児教育をめぐる状況は大変厳しいことがわかりました。共同研究者の先生からは、「この実践はまわりの人々の善意で成り立っていることなので、これを継続し広げていくためには制度化することが必要」とのお話がありました。

他の報告では、「発達理解は人間理解」という「発達学習」の実践に新しい視点をいただきました。特別支援学級担当の先生が通常学級で人間の発達過程についての授業をし、お互いの理解を深めるというものでした。私は今まで、障害のある子もない子と一緒に活動することで徐々に理解されていくのでは、との思いで実践してきましたが、そこに科学的な知識があれば子どもたち同士の理解もさらに深まるのではないかと思いました。

また、今回の「教育のつどい」に参加して自分の勉強不足を痛感しました。私が良かれと思っていた「ユニバーサルデザインの授業」や「インクルーシブ教育」も一歩間違えば大変なことになる。それは、「ユニバーサルデザイン」の名の下に行われる画一化された授業だったり「インクルーシブ教育」の名の下にほとんど配慮もなしに障害児を通常学級に在籍させたりということがあり得るということです。改めて、「個々の子どもの現状から出発し、その子に必要な課題をその子のペースで」という障害児教育の基本や「私たち抜きに私たちのことを決めないで！」というこれまでの障害者運動のスローガンの意味を考えさせられた集会でした。



子どもたちに「自己決定権」を持たせること

利尻町仙法志中学校 記虎 孝弘

1. 教育研究全国大会（香川県高松市）に参加して

私が参加した分科会「子どもの人権と学校・地域・家庭」では、子どもの人権を保障するために、学校・地域・家庭にどのような在り方が求められるのかを、共同研究者や各学校の実践をもとに議論しました。一概に人権といっても、公に人として保障された権利というぐらいの認識しかなかった私にとって、この分科会での問題提起やレポート発表は新しい発見が多く、非常に有意義なものになりました。このような機会を与えていただいたことに改めて関係者・教職員組合員の皆さまに感謝したいと思います。



2. 分科会の議論で

まずは現代の子どもたちを取り巻く環境を、国の教育政策と絡めて行われました。特に全国学力学習状況調査の再開ともなって、テストの点数による学力評価の功罪というか、競争にはしる新自由主義教育に、子どもたちの学習権がないがしろにされている部分に焦点を当て、単なる競争にとらわれない学習における価値観を育てる機会を、ユースワークなどを例にあげて議論されました。なかでも共同研究者の一人である白梅学園大学の増田修治教授の提言の中にあつた、子どもたちが抱える不安や怒りなどのネガティブな感情を承認することによる感情制御の視点は、自分の視野を大きく広げてくれるものでした。

3. 「自己決定権」という考え方

一方で私が報告したレポート・議論の中で、自分が微力ながらこれまで培ってきた経験則を補完できた部分もあります。私は「枝中プライドの育成」というレポートで、前任校である宗谷管内枝幸中学校の特色ある学校行事と部活動を紹介してきました。これは文化祭や部活動を通して、自分の通う学校に誇りを持ち、家庭や地域の協力に感謝をこめ、将来的に生まれ育った地域に貢献したいと思える子どもたちを育てるといえるものです。特に顧問を持っていた野球部の課題や、恵まれている点をあげ、61年ぶりとなる全道大会出場権の獲得と、その北海道中学校野球連盟主催の全道大会で準優勝につながった要因を私なりに分析するところに焦点をあてました。発表後の議論で助言いただいた部分でもありますが、子どもたちをやる気にさせたり、決定を委ねたりして、子どもたちの主体性・主導性を尊重することがいかに大切なのかを実感しました。もちろんこれは特別活動だけではなく、教科指導や生徒指導などの教育活動全般にいえることですが、子どもたちが自ら気づき、目の色を変えて取り組む仕掛けづくりが大事なのかもしれません。

4. 終わりに

人権とも結びつけると、子どもは権利を与えられるだけではおもしろくないはずで、教師が刺激と機会を与えて、子どもが自分で権利をつかむからこそ意義があるのかもしれません。教える知識や技術とともに、子どもたちが考え動くために、もっと教師としての引き出しを広げたいと思いました。

初めて「教育のつどい」に参加して

平取小学校 國保 いずみ

四国香川で全国から集まる仲間と共に、私としてはこの3日間を通して、安倍政権による今の教育政策が如何に大きな問題かがはっきりとして、確信を新たにした研究集会でした。

国民のものである教育や子どもたちのものである学校を根こそぎ奪い取り、戦後大切に築き上げてきた民主教育を踏みこじろうとする教育の歴史的危機に直面し、その中で子どもたちや教師がどれだけ苦しみ翻弄されているのか、私は涙が出るほど悲しく悔しい気持ちになりました。そして、自分がやれることも“決意”としてはっきりさせることができました。



○今、私がやれること

- ①断ち切られたつながりをつなげる、つながること。
- ②“学ぶこと”がおもしろいと思える授業づくりを大切にすること。
- ③子ども一人ひとりに出番があり、学校生活がおもしろいと思える学校づくりをすること。
- ④子どもに寄り添い(傍にいて)声を聴くこと。
- ⑤今の学校や教育のおかしさや、それによる大変さ(教師や子どもの悲鳴)を外に知らせること。
- ⑥子ども一人ひとりの存在そのものを大切に、すばらしさを発見してそれを保護者も含め発信(共有)していくこと。
- ⑦荒れやふさぎにこそ丁寧に寄り添うこと。
- ⑧同僚と、子どものすばらしさの共有で喜び合い、悩みや弱音を出し合うことで支え合い元気になること。
- ⑨子どもとの絆や信頼感を築き、人間的感覚あふれる学校づくりをすること。
- ⑩「おかしい」とか「これは大事」と思うことは、一人でも小さな声でも口に出して言うこと。

今、日本の教育や学校がどんなふうになっているのかつぶさに知ることから、仲間と共に羅針盤を確認し勇気と希望を紡ぐとても刺激的で熱い3日間でした。うどんもおいしかったです。参加させていただいたことに感謝します。みなさん、ありがとうございました。

「総合的な学習の時間」を様々な切り口から展開すること

上ノ国町河北小学校 滝澤 圭

9月の道教組だよりをみなさんお読みなされたことでしょうか。教育のつどいIN香川の見出しには「悪天候の中、全国からのべ5000名の参加」とありました。悪天候の中と書いたのは、我が檜山の書記長の中山晴生さん。今回同行することになったときから心配していましたが、初日から雨。サブネームを決定づける3日間となりました。



教育のつどいは、昼からの開会集会とその後の教育フォーラムではじまります。開会式と松本春野さんと小森陽一さんの対談の様子は他の方も触れられているので、フォーラムの様子からお伝えします。

7つのフォーラムの中から私が参加させていただいたのは、「3・11から3年半子どもと学校の課題は」です。宮城、福島、愛媛から3名の方の報告がありました。その中で宮城県の小学校教諭 阿部先生の報告の一部を紹介します。

阿部先生の勤務先は宮城県の南に位置し福島にほど近い太平洋に面した小学校です。3月11日、今までに体験したことのない強い揺れがしばらく続いたあと、校内にいる児童はまず親に直接手渡す判断をしたそうです。迎えにこられる親、そうでない家庭もありましたが、学校に待機したそうです。しかし、その後大きな津波が押し寄せることを知り、高台に避難することを決断したそうです。ぎりぎりのところで児童を誘導できたのですが、親元に引き取られた児童やその前に下校した児童の中にはこの津波の犠牲になった子が何人も含まれていたそうです。一瞬の判断、高台へ全員避難の判断がただちにできていれば……。

ある学校では、大変大きな被害にあいました。児童と教職員の多くが津波にあいました。一方その近くの同じような立地条件の学校では逆に1名の犠牲者も出ていない報告もあります。2者の違いは判断です。後者の学校では1週間前に研究授業における協議の際に全ての教師から様々な意見の交換がなされたそうです。校長、教頭含め自由に発言のできる学校で、けして校長が結論づけたり、まとめるようなことはなく、だれもが発言のできる学校であったために、当時のただならぬ状況に一般教諭が、校長の学校待機指示に対して、即高台非難を提案し行動したために全員無事だったのだそうです。最終的な指示は校長であっても職員全員が最善の考えを出し合える学校づくりが子どもを救ったということです。

2日目からは分科会です。わたしの参加した「第27分科会 生活・総合」は東京、京都、大阪などからの報告がありました。私は一昨年12月スケソ漁の船に乗せていただいた時のスカイプ通信とその時のビデオをもとに組み立てたスケソ漁と今の子どもたちをむすびつける授業の報告をさせていただきました。私のように地元を目をむけて、人にあい、風土を感じて子どもをそこに誘う実践はそれぞれの地域で行われています。その中でも大阪からの報告はまた違った切り口で興味深いものでした。大阪の西尾先生の実践報告のテーマは「Life－自分を見つめよう」です。自

分自身に目をむけさせて、命・生を考えさせる取り組みです。今を一生懸命に生きるために全力で行事にとりくむためのテーマづくりや民舞のとりくみ、学級歌を作る。花壇を田圃にして食を見つめ、農家の方に教わりながら食するまで、私の誕生をインタビューして、それまでの自分と今を見つめる。そして発表会。一見どこでも取り組まれていることですが、一年を通して「命・生」をテーマに貫いた実践は骨太なものになると感じました。

教科書のない「総合的な学習の時間」を逆に一冊の教科書からつくらなくてもよい、様々な切り口から展開することで、学習を総合的にフル活用しながら感じ学べることを改めて実感させられた時間でした。この他にも歴史ある京都の町を探検する「お地蔵様をさぐる」実践や、東京の和光学園のこだわり「かまぼこ作り」など面白い実践を聞かせてもらいました。貴重な3日間でした。

そして、3日目は青空を望むことができました。しかし、それは中山氏と合流する前で、一緒に昼食をとったあと店をでた途端、やはり降ってきました。もうだれも驚きません。雨の四国もいいものだと思うことにしたからです。色々な意味で貴重な経験をさせていただきました。ありがとうございました。

編集後記

「教育のつどい in 香川」に参加されたレポーターの方の感想を読みながら、「みなさんに参加してもらい、良かった」と率直に感じました。各分科会での論議や、そこで学んだことが読み手に伝わってくるからです。

是非この感想を多くの方に読んでいただき、刺激を受けながら各職場で子どもたちとの実践に役立てていただきたいものです。そして、11月の全道合研に集まっていただき、実践交流を深め合いましょう。

最後に北海道参加団の要として活躍していただいた中山さん、司会者として論議を深めていただいた内糸さんにも感謝を述べたいと思います。

道教組 新保